

# 給液量とハウス内湿度が ミョウガ「水やけ症」の発生に及ぼす影響

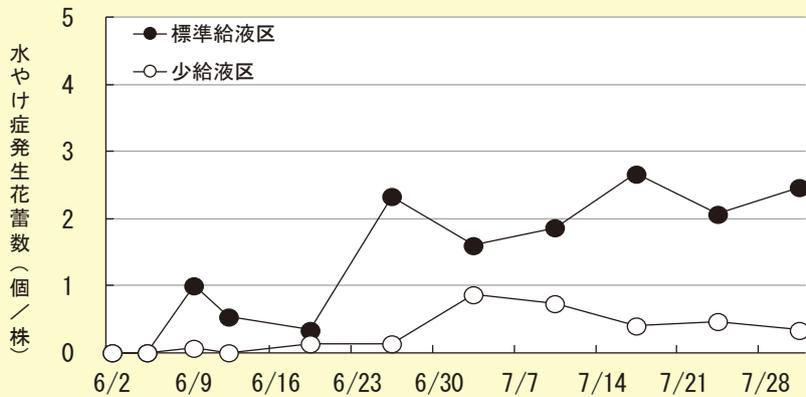


図1 給液量が「水やけ症」発生に及ぼす影響

注1) 「水やけ症」発生花蕾数は収穫直前に培地上で調査した。  
 注2) 5月7日以降、少給液区では、標準給液区と1回あたりの給液量は同じとし、給液回数を1/2になるようにタイマ制御で給液した。



写真 「水やけ症」発生花蕾

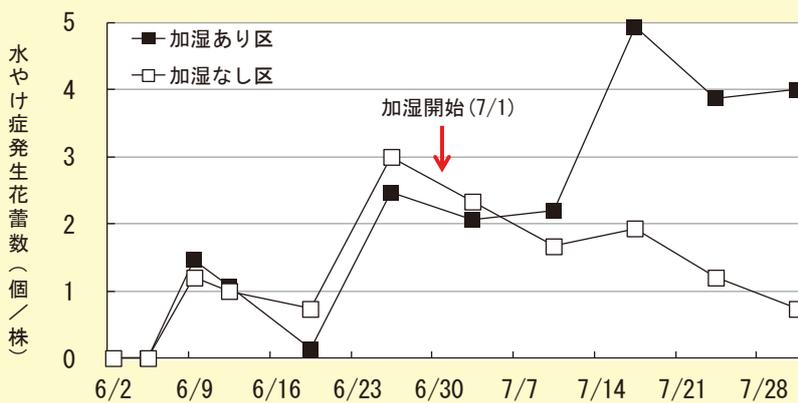


図2 ハウス内の加湿処理が「水やけ症」発生に及ぼす影響

注1) 「水やけ症」発生花蕾数は収穫直前に培地上で調査した。  
 注2) 1.5aのハウス内を南北で半分にポリフィルムで仕切って両区を設けた。加湿あり区は、8:30~16:00にハウス内温度26℃以上で湿度75%以下の場合に細霧装置を最長120秒稼働させ、湿度80%以上になると停止させた。また、1日4回、計1時間かん水チューブを使って通路に散水した。

高知県産のミョウガは、6~9月にかけて棚持ち低下や腐敗事故が発生し、問題となっています。その原因の一つとして、花蕾が半透明化して水浸状に軟化する「水やけ症」(写真)の発生がありますが、発生要因が明らかになっていないため、対策がとられていません。

そこで、給液量とハウス内の湿度が「水やけ症」の発生に及ぼす影響を調査しました。

その結果、6月以降、少給液区に比べて標準給液区では「水やけ症」が多く発生しました(図1)。また、加湿開始16日後から加湿

あり区で「水やけ症」が多く発生しました(図2)。これらのことから「水やけ症」の発生には給液量と湿度が関与していると考えられました。

なお、「水やけ症」はいずれの試験においても同時期に発生し始めたことから、給液量や湿度以外の要因についても調べていきます。

現在、高湿度条件が「水やけ症」発生に及ぼす影響を再確認するとともに、給液方法の違いについても調査しています。

(施設野菜担当 松田歩実 088-863-4918)